かささぎ 通信 第92号

毎月第2金曜日 13：30～15：30　　2020年　5月　8日　発行

刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二〇年四月の「森三郎の作品を読む会」休会。今号では第91号で予告したように一九三三年頃からの森三郎作品の作風の変化について見ていきます。

新型コロナウイルス感染拡大防止のために外出自粛生活が続いています。森三郎の作品「城址のクラス会」（雑誌『新文明』一九六四年十月号）に「密閉空間」の換気について書いてあることに気づきました。この作品は小学校卒業以来四十年に近いクラス会に初めて出席した際の話です。目次には「小説」となっていますが、自身の体験を元に描いた作品と思われます（参照　刈谷市郷土文化研究会会誌『かりや』19号・平井芳男「故郷視点からの森三郎戦後著作」、33号・鈴木哲「森三郎と『一二三会の歌』」）。この中で、子ども時代に聞いた先生の話として、「うちのねんねえなんかは、一人で寝かせてあるときでも換気といふことを考へて、障子のはじをちよつと開けておいてやる」とか「障子も開けずにもうもうと埃をあげて掃除をしてみたところで、埃を移動させるばかりだ」という類の話が、「授業よりも、もの知らずの子ども達を利口にした」と思い出を語っていました。子どもたちがこのような機会に衛生についての知恵を身に付けていたことが分かります。『赤い鳥』一九三三年三月号の講話通信では鈴木三重吉がジフテリアワクチンの接種の奨励について書いていることも、時代背景が感じられます。

さて、森三郎の『赤い鳥』掲載作品の出発は、古典や伝説の再話が中心でしたが、前号で紹介したように一九三三年頃から「少年少女の心理を描くリアリスティックな作品」（酒井晶代）へと変化しました。そこで、一九三三年二月号から三四年一月号までの一年間に『赤い鳥』に掲載された森三郎作品中、講話通信欄に鈴木三重吉の評価が出ている作品をまとめてみました。（　）内は主人公、三重吉の評価。

一九三三年二月号「うんすんガルタ」（江戸時代の寺子屋に通う十一歳の長吉、評価おもしろい構想）／三月号「だゝつ子」（尋常三年の正男、評価すぐれた現実的な作篇）／四月号「雪」（六年生の弘、評価すぐれた現実的な作篇）／同「けんかの後」（四年生の研吉、評価すぐれた現実的な作篇）／五月号「パチンコ」（五年生の民男、評価真実味のあふれた傑作）／六月号「あのころ」（五年生のみち子、評価新鮮な話題）／七月号「乳母」（尋常三年の時の「私」＝少年、評価すがすがした真実味）／九月号「副級長」（六年生の克巳、評価新鮮味）／十月号「ハーモニカ」（小学生の「ぼく」、評価真実な作篇）／同「杉でつぽう」（尋常四年の「私」＝少年、評価真実な作篇）／十二月号「五年のころ」（五年生の道子、評価あの年代の少女の気持の動きを、自然のまゝよくゑがいた、真実な作品）一九三四年一月号「沼」（一年生の雄吉、評価稀に見る傑作として非常な好評でした）

「現実的」「真実味」「新鮮」などの評価が目立ちます。一九三三年四月号を最後に北原白秋が『赤い鳥』を去りますが、それを契機に『赤い鳥』が「現実的な傾向の童話」重視に編集方針を変えたことに、編集記者・森三郎が応えようとしていたことの現れとみられます。（参考『赤い鳥事典』酒井晶代「森三郎」pp.220-222）

前掲の作品以外にも時代物の「笛」（平安時代初め、五月号）や「一人相撲」（江戸時代の寺子屋、七月号）などにも少年の屈折した思いがよく出ています。「笛」の主人公貴族の息子の十二歳の朱実は、貧しい少年の心を傷つけた自分の行為に気づき、泣きじゃくるだけでした。この作品を三重吉が「いいものを書いてくれた」と何度も何度も褒めてくれたと『鈴木三重吉研究』「貸間探し」（『新文明』一九五八年十二月）に三郎は書いています。次回の作品「銀作」も江戸時代の寺子屋での少年の心理を描いていて、楽しみです。

次回「森三郎の作品を読む会」の作品　（六月十二日実施予定）
「銀作」（『森三郎童話選集　夜長物語』所収）